

【研究ノート】

日本事情解説書の日本人女性像  
——ウクライナ・ソ連・ロシア帝国の場合

江川裕之

要旨

海外の日本事情解説書には、ステレオタイプ化された日本についての記述がある。読者がそれを日本との交流によって再確認したり修正していく場合もあるが、多くの場合はステレオタイプ化されたイメージが固定化され受け継がれていく。そうしたステレオタイプ化された記述の中から日本人女性像を取り上げ、そのイメージが海外でいかに形作られ伝えられてきたか、ウクライナの例をソビエト連邦時代、ロシア帝国時代へ遡りながら紹介し、考察する。

キーワード

日本事情、女性像、ステレオタイプ化

1. はじめに

本稿の目的は、日本語教育および日本事情教育において、ステレオタイプによる偏見を克服するために、性差に由来するステレオタイプを観察し考察を加えることである。そのために、ウクライナで出版された日本事情解説書とそれにつながるソビエト連邦とロシア帝国時代に出版された書籍を研究材料とし、それらの中の日本人女性像を研究対象とした。1991年に独立したウクライナは、日本との人的文化的な交流が比較的少なく、日本との交流が活発な諸外国と比べ日本に関する情報も限られることから、ステレオタイプを形成しやすい土壌があると考えられる。したがって、ウクライナの事例を観察することで、日本人女性に対するステレオタイプ形成の過程や状態が比較的簡易な形で観察できるはずである。

2. 日本事情解説書の記述とステレオタイプ化されたイメージ

2.1 ウクライナ

ウクライナの大学では、初級日本語と同時に「言語地域研究」の講義で日本社会の性差や日本語とジェンダーの関係を簡単に学習するのが一般的である。現代ウクライナの代表的な教科書であるボンダル O.I.とボンダレンコ I.P.共著『言語地域研究・日本;』<sup>注1</sup> (2012) の第15章「日本の家族」の中の「日本の家族制度、家庭の中での男女の役割」では、古代の母系社会の説明後、日本人女性は封建時代でもまったくの無権利状態であったとは言えず、家事を担い家計の采配を行っていたと評価している。そして男は仕事、女は家庭という役割意識が現在も残っている一方で、近年の経済停滞によって主婦のパートによる家計収入に対する貢献が増している、ほぼ正確な記述<sup>注2</sup>を行っている(2012: 402-405)。しかしこの本は、同章冒頭に「我々の夫たちが、夕食に間に合わないとき妻に連絡するのに対して、日本の夫たちは今日は晩御飯に間に合うと連絡する」と書かれてあるように、個々の事例を一般化し夫婦のイメージをステレオタイプ化してしまう傾向がある。またこの章の「日本の性産業」では、かなり偏った日本の夫婦像が描かれている。日本社会での性産業や所謂「援助交際」を例として挙げた後、「日本人は性産業に対し平静である。このような夫たちの行動を妻たちは裏切りや欺瞞だと感じていないようである。だから日本では離婚が少ないのかもしれない」と考察している。さらにこの後で、「日本では妻が子育てをし、夫は

形式だけで子育てをしない、もし離婚しても夫は子どものことをまったく忘れてしまい、妻が子どもを引き取り養育していかななくてはならない、なぜウクライナの男性が離婚後に裁判に訴えて休日に子どもたちに会おうとするのか日本人男性にはまったく理解できない」と記述している(2012: 414-415)。

この教科書では第11章「日本文化の諸要素」に日本語の特徴が解説されているが、日本語とジェンダーの問題に関しては「日本人女性の言語行動の特徴」として1ページだけ簡単に触れている。その解説では、日本語の男女のことばは大きく違っており、その違いは主に会話に現れ、封建時代に形成されたものが現在も残っていると説明されている。「社会的役割の差異が大きいほど、男女間のことばの差異も大きくなる」、つまり話者の社会的立場や場面にも影響されるとも書かれている(2012: 291)。またこの教科書には「女ことばの特徴は男ことばより丁寧で、時にして情報伝達機能に支障を与える感情性があり、日本社会の特徴である伝統的な女性を『卑下するもの』である」と説明されている(2012: 291)。しかしどんな例が、どのように情報伝達に支障を与えているのかが示されておらず、さらにこの説明では女性を卑下している具体的な例文や考察もない。女ことばは、女性を卑下するためのもので、また女性を卑下することが日本社会の伝統であり、日本は男尊女卑社会であるというイメージを読者に固定的に印象付ける恐れがある。

この日本事情解説書は、一般向けの啓蒙書ではなく日本語を専門にする学生用に書かれた教科書であり、将来教師や研究者となるかもしれない読者が日本語とジェンダーにかかわる表現を女性への性差別の産物と単純に結論付ける恐れがある。一方で日本人女性を語る上で取り上げられがちな芸者は、日本舞踊がお座敷芸「京舞」を基に発展したという説明で出てくるのみである(2012: 340)。後述するソビエト時代やロシア帝国時代の一般向け日本事情解説書が、芸者を過度に理想化するような記載をしているのと比べると、この教科書では情報だけを端的に提供している。

記述された日本人女性像は、著者たちが過去に見聞きした個別の事例、映画や文学の作品やマスコミを通して得られた情報がその原型になっていると考えられる。またその基底にあるのは著書たちが育ったソビエト時代に得た日本人女性像である。

## 2.2 ソビエト時代

フセヴォロド・オフチニコフのエッセイ『桜の枝』は広く人々に読まれ、ソ連人の対日観に大きく影響した。著者は1962年から1968年までジャーナリストとして日本に駐在し、その体験を基にした日本事情としてこれを発表した。このエッセイがイギリス事情を書いた『樫の根』などと共に評価され、彼は1985年にソビエトの国家表彰を受賞した。1986年には、当時ソ連邦の構成国であったウクライナ社会主義共和国でも『桜の枝』と『樫の根』を合わせ『桜と樫』として改題された書籍が出版されている。

著者は、マルコ・ポーロ、岡倉天心、秋元俊吉、谷崎潤一郎、犬養道子、ウェルト・シュルダン、バーナード・ルドフスキー、フランク・ギブニーなどの著作からの引用を織り交ぜながら、読者に自身の日本観を提供している。また後で述べるロシア帝国時代の日本事情解説書『日本とその人々』(1904)からも多くの引用をしており、その著者たちからも影響を受けている。

オフチニコフは、芸者を歌や舞だけでなく教養で男性を楽しませる達人であると解説し、さらに日本人男性は古来より女性を家庭や子孫繁栄のための妻、精神とその教養のための芸者、官能のための花魁(現代では風俗産業の女性たち)、という3つのカテゴリーに分けていると紹介している(1986: 58, 59)。また日本のサラリーマンは一週間に二、三回しか帰宅せず、妻は深夜に夫が酔ってホステスたちと帰ってきててもじっと我慢し、ホステスをお茶でもてなし夫の遊興費を支

払い、礼を言わなければならない、夫の浮気に嫉妬することは日本ではモラルに反する、と解説しており、1960年代に見聞した個々の「事実」を一般化することによって奇異な日本人女性像を読者に伝えている(1986:104,105)。一方で日本の電子機器産業で働く忍耐強い少女たちの手で、急激に先進工業国へと変化しつつある当時の日本が成り立っており、「少女たちは5-7歳になると工場に来て、結納資金を稼ぐ」と記述している。そしてこれら若年女性労働者たちは、確固たる社会層であり戦後日本の社会経済の無視できない構成要因の一つであると紹介している。若者や男性がいなくなった農家の重労働を担う農村部の婦人たちの状況や、都市部の女性の日雇いや非正規の低賃金労働、1980年代の女性の平均給与は男性の約半分であるという賃金格差も報告している(1986:140-142)。

オフチニコフが日本に滞在していた時期から、『桜の枝』がソビエト国民に広く読まれ続けていた間にも、日本では社会や女性に関する意識は変化していたが、ソビエトでは少し遅れた形の日本人女性像が広く伝わった。この本に書かれた少し古い日本人女性像は、従来のステレオタイプを補強するとともに、新刊書の出版が困難であった1990年代ソビエト崩壊直後の経済的な混乱期にもウクライナをはじめとする国々に影響を与え続けていくこととなった。<sup>注3</sup>

### 2.3 ロシア帝国時代

現在のウクライナの領域の大部分はロシア帝国の一部を構成しており、首都サンクトペテルブルグやモスクワをはじめ他の構成地域との長期にわたる人的文化的なつながりが深かった。東方へ急速に膨張するロシア帝国では、19世紀後半から20世紀初頭、欧州のジャポニズムの影響、黄禍への警戒など、日露戦争前後に日本に対する関心が芽生えてきた。このような中でバジル・ホール・チェンバレンの*Things Japanese*『日本事物誌』第4版が、日露戦争後1907-8年にサンクトペテルブルグで翻訳された。この本の「女性」(2008:149-165)という章でチェンバレンは、日本女性は女性的で、やさしく、おとなしく、忠実で、かわいいが、その人生の規範は父と夫と息子に従うことであり、妻は夫の奴隷であると同情している。また同性である在日ヨーロッパ女性の意見として、日本女性の素晴らしさを「日本人男性と同族とは思えないほど」と褒め称えている。この従順さの秘密を説明するために、貝原益軒の著作を基にした教訓書『女大学』も紹介されている。その後で、このような女性の置かれている隷属的状态は中上流階級の女性に特徴的で、農民や職人の女性はより自由であり、仕事だけではなく夫の意思決定にもかかわり、夫より頭がよければ家計や家庭全体を担っていくこともある、と日本女性の能力を高く評価している。そして日本でも20世紀の「新しい女性」が、当時めずらしかった自転車に乗り、印刷所や電話局で働いていることを報告している。また芸者に貢がれた貧乏学生が出世し政府高官になり、その芸者が妻となり貴婦人となったというエピソードを交え、成功者としての芸者を読者に紹介している(2008:181,182)。

チェンバレンの*Things Japanese*は当時改訂されながら版を重ね、各国語に訳されて欧米の日本人女性観に大きく影響し、ややもするとヨーロッパ人男性に都合の良い否定的な「傲慢な日本人男性像」と肯定的な「従順な日本人女性像」が出来上がっていった。現在では、この本は歴史的な情報を読み取る資料になったと考えるのが妥当であろう。しかし著作権が切れた書籍は、著作権料を支払うことなく再版できるためと思われるが、この日本解説書のロシア語訳は2008年にロシア連邦で日本語独習者用教材として再版されている。もちろん、読者がこの独習者用教材で現代の日本人女性や社会をすべて理解するとは考えられないが、日本に興味を持ち始めた独習者に時代を越えてステレオタイプ化されたイメージが伝えられる可能性がある。

また日露戦争の最中の1904年に、ヴォストーコフ G.ほかによる日本事情解説書『日本とその

人々』が出版された。これは知識層のための一般教養書であるが、統計や地図、挿絵を使って、かなり詳細に自然、歴史、国家体制、言語・文学などを説明している。敵対国ではあるが、日本に関する記述は全体として客観的である。最後の「まとめ」によると、日本人の性格を示す記事は当時かなり出版されていたようで、その中の日本人に関する評価は、まったく相反する二つのタイプに分かれるとされている。それらは、商人などによる狡猾で不誠実なイメージと、旅行者による常に礼儀正しくおとなしいという過度に理想化されたイメージである。

著者の一人ヴォストーコフ G.は、「日本の言語と文学」「日本の芸術」「日本の社会、家庭、宗教」の各章を担当している。日本語の名詞の性については、語幹に男性を示す「お」、女性を示す「め」などを付けて作り、例として甥や姪のことを表すと思われる「ovi (親類の男性) mevi (親類の女性)」「オウシ、メウシ」「ヒコ、ヒメ」「オノコ、メノコ」などを挙げている(1904:264)。女性の衣服に関する記事の中では、女房ことば「ユモジ」も見ることができる(1904:319)。

また「日本の社会、家庭、宗教」の章では庶民生活を実際に観察したと思われる記述の中で日本人女性を好意的に報告している。日本人の妻は確かに夫に従属しているが、他の東洋の国のように奴隷的ではなく、家庭の中で主婦として敬われる立場にあると評価している(1904:343)。

ヴォストーコフは、かなり詳細に日本事情を描写しており、当時の風呂屋の混浴の様子や縁側で紅をさす上半身裸の若い女性などについて触れ、これはモラルがないのではなく、日本人は裸を見ても木や空を見るように気にせず、むしろヨーロッパ女性が着る胸が開いたデコルテが意識的に男性を誘惑するものであるとして日本人女性には受け入れられない、と書いている。日本人女性は身分の差なく、服装だけでなくしぐさでも男性に対する気持ちを率直には表さない、謙虚さで美を表現する、と分析している(1904:329)。また著者は茶屋での芸者や舞妓と接し、芸者は知性の高い芸能人であると評価し、茶屋や旅館の女中「ムスメ」たちの可憐さともてなしぶりに感銘を受けている。同時にヴォストーコフは、日本女性の権利獲得にも好意的で、ヨーロッパ化が進む中で、ヨーロッパのフェミニスト大会に日本人女性の代表者が参加したことも伝え、今後法律も女性側に立ち、古い考え方の強固な壁を打ち崩すだろう、と述べている(1904:345)。このように『日本とその人々』のヴォストーコフの記事は、エキゾチックで調和の取れた社会に住む「理想化された日本人女性像」を読者に強く印象付けている。

### 3. 考察とまとめ

以上のように、ロシア帝国において日本人女性のイメージは理想化されていた。これは当初、日本人女性とその生活を垣間見たヨーロッパ人たちの素直な驚きから出たものであったかもしれない。しかし同時に日本人女性を過度に理想化した時期は、ヨーロッパで女性の社会進出が活発になり権利意識が芽生え出した時と重なる。ヨーロッパ人男性たちにとっては、従順な日本人女性を過度に理想化することで、ヨーロッパ人女性たちを牽制する効果もあったかもしれない。また政治的には極東にもヨーロッパの覇権がおよび、敵対することも多かった日本人男性の傲慢さや狡猾さを際立たせる役目もあったであろう。日清戦争で強大な清をやぶり西欧化を目指す日本という国に対する警戒や関心を背景にして、傲慢な日本人男性と従順で忍耐強い日本人女性というステレオタイプは、日本を理解するために便利なツールであったはずである。

ロシア革命後、日本は革命に干渉し極東とシベリアに出兵した(1918-1922年)。ソビエト連邦との国交が樹立した後も、ノモンハン事件(1939年)などの軍事的対立があり日本に対する警戒は続いた。また第二次世界大戦後、廃墟の中から経済的に復活しようとする日本は、ソビエト国民にとって警戒と同時に驚きの対象ともなった。そして国家の検閲後に出版される書籍は、社会主義の優越性を直接的間接的に強調しなければならず、日本に関する解説書もその例外ではな

った。東西冷戦の中、社会主義体制のソビエトにとって資本主義国である日本は批判しなければならない対象であり、男性に抑圧されている日本人女性というロシア帝国時代から続くステレオタイプは、有効な宣伝材料の一つであった。

ソビエト連邦崩壊後、独立国家となったウクライナでは出版に対する検閲はなくなった。ウクライナ国民にとっては、日本とは領土問題もなく政治的な問題で対立する関係ではなくなった。しかし日本との交流が劇的に増えたわけではなく、ロシア帝国やソビエト連邦時代から続いていた日本人女性に関するステレオタイプも、大きく変わることはなかった。

本稿では、現代ウクライナ人に関係する3つの時代の日本事情解説書4冊の中で描かれた「傲慢な男性に抑圧され我慢する日本人女性」「家事と子育てを担う日本人女性」といったステレオタイプ化されたイメージを紹介した。ウクライナでは、本稿で観察した日本事情解説書の例でも明らかのように、日本人女性や家族に対する過度なステレオタイプが残っており、今後はこういった偏見をなくしていくためにも客観的な日本理解が広がることが望まれる。しかしながら、まだ以下に述べるような多くの課題が残されている。

ユディット・ヒダシ(2005)の指摘どおり、一度作られたイメージを変えるような強い理由がなければ、ステレオタイプ化されたイメージは変わらない。この固定性によって、日本人女性のステレオタイプ化されたイメージは時代を超えて今後も伝えられていく可能性が高い。日本人女性のイメージに関して、ヒダシ(2005)の「受け取る側はそれしか知らないことによって、すでにあったステレオタイプが正当化され続けることになる」という指摘も、本稿で紹介した日本人女性に対するステレオタイプの継続性に当てはまる。

さらに、日本に滞在したりして日本語がわかる著者たちが、日本人女性に対するイメージを得たときから解説書を発表するまでの時間差によって、また、それら日本事情解説書が出版後も長期にわたって新たな人々に読み続けられることによって、前世代のイメージが次世代へとつながっていく。どんなにインターネットなどを利用しリアルタイムで日本事情が得られ、直接の人的交流が多くなっても、「傲慢な男性に抑圧され我慢する日本人女性」「家事と子育てを担う日本人女性」といった事例、または小説や映画の描写などによって、すでに固定されたイメージが再生産され、ステレオタイプ化のループは途切れがたい。

外国事情の解説書は、客観に徹しようとするれば単なる統計集になってしまい、主観的に表現すると私的な感想を述べたエッセイになってしまうという恐れがある。一般書籍の場合は、日常茶飯のことは話題として取り上げられにくく発表もされにくい。教科書の場合は、学習者に興味を持たせながら客観性を保持しなければならないというジレンマがある。したがってこれら日本事情解説書は、事実をさらに際立たせることで受け手に強い印象を与え、奇異で特殊な事例によって日本の姿を極端にステレオタイプ化してしまう恐れもある。以上のようなステレオタイプの連鎖を断ち切ることが今後の大きな課題だと言えよう。

本稿では主にウクライナの日本人女性に対するステレオタイプ化されたイメージについて述べてきたが、日本国内でもステレオタイプ化され無意識にまたは恣意的に作られた性差のイメージから逃れることはできない。ジェンダーと日本語の研究において、それらに関係する事象を学術的に解明しようとするとき、「男らしさ＝男性性」や「女らしさ＝女性性」として認識される性差イメージや、さらに社会の中で継続され固定化されたステレオタイプを注意深く観察し、それらがもたらすかもしれない偏見を排除していくことがジェンダー研究における重要な鍵となるのである。

\*本稿は2015年3月に京都大学で開催された「日本語ジェンダー学会・第16回年次大会」での

発表を元に、改稿したものである。

## 注

1. この教科書ボンダル O.I.、ボンダレンコ I.P.共著『言語地域研究・日本』は、ウクライナ語で書かれ、原題は *Лингвокраїнознавство Японії (Linhvokrainoznavctvo Yaponii)* である。(参考文献参照、ISBN 978-966-489-131-5) 同書は 2016 年 3 月末現在、ウクライナで唯一出版された日本事情に関する教科書であり、キエフ国立大学をはじめウクライナ全国の日本語教育の場で利用されている。本稿の引用部分は、他の日本事情解説書も含めウクライナ語やロシア語原文から本稿筆者が和訳したものである。[\(本文に戻る\)](#)
2. 独立行政法人労働政策研究・研修機構ホームページの厚生労働省「厚生労働白書」、内閣府「男女共同参画白書」(いずれも平成 26 年版)及び総務省「労働力調査」をもとにした資料「専業主婦世帯数と共働き世帯数の推移」によると、1980 年は専業主婦世帯数 1114 万、共働き世帯数 614 万であったが、2014 年には専業主婦世帯数 720 万、共働き世帯数 1077 万になっており、主婦の家計に対する貢献あるいは家庭外労働が増加していることがわかる。  
<https://www.jil.go.jp/kokunai/statistics/timeseries/html/g0212.html> [\(本文に戻る\)](#)
3. ロシア連邦では 2001 年に『桜の枝』の続編としてオフチニコフ V.V.による『桜の枝 30 年後』が出版された。しかし対日関係が閉鎖的であったソビエト時代に限られた情報の中で発表された『桜の枝』と比べると、社会的な影響は限定的と思われる。[\(本文に戻る\)](#)

## [参考文献]

- ユディット・ヒダシ (2005) 「日本におけるジェンダー的価値観—ヨーロッパ人の視点から—」  
『日本語とジェンダー』 第 5 号
- BONDAR O.I., BONDARENKO I.P. (2012) Бондар О.І., Бондаренко І.П. *Лингвокраїнознавство Японії, Навчальний підручник*. – К.: Видавничий дім Дмитра Бураго, 2012. –696 с. (ボンダル O.I.、ボンダレンコ I.P.共著『言語地域研究・日本』 原文はウクライナ語)
- CHEMBARLAIN V. H. (2008) *Традиційна Японія: по книзі Б.Х. Чемберлена «Вся Японія»*. – М.: АСТ: Восток–Запад, 2008. –252с. (チェンバレン V. H. 『日本事物誌』 原文はロシア語)
- OVCHINNIKOV V.V. (1986) Овчинников В.В. *Сакура и дуб: Впечатления и размышления о японцах и англичанах*. – К.: Дніпро, 1986. –479 с. (オフチニコフ V.V. 『桜の枝』収録『桜と榎』 原文はロシア語)
- VOSTOKOV G. and other (1904) *Японія и ея обитатели*. – СПб.:Брокгаузъ-Ефронъ, 1904. – с. 364. (ヴォストーコフ G.その他『日本とその人々』 原文はロシア語)

(えがわ ひろゆき タラス・シェフチェンコ記念キエフ国立大学上席講師)